

---

# 恋愛脳の私 × 戦争

斉戒 新

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛脳の私×戦争

### 【Nコード】

N2854Y

### 【作者名】

斉戒 新

### 【あらすじ】

戦争を知らない私と、  
ただの日常と、  
私の将来。

## 一章

### プロローグ

広島市への原子爆弾投下は1945年、第二次世界大戦の終戦日のわずか数日前のことだった。八月六日午前八時十五分、何気ない一日、些細な一日。でも、当時の人達にとっては毎日を懸命に生き抜くことが一番に大切なことだった。

けど、その命は一つの兵器によって灰燼と歸した。

思いも、願ひも、形あるモノも。すべて粉々に、無情なモノに変えてしまった。

そのことを私は知らない。

高校生である私は戦争なんて夢物語に近く、その惨状なんてどこか他人事に近かった。だって私は当時に生きていないのだから、その光景など見たことないのだから。

だから、私は何も知らない。

そんな私の、何も知らなかった私の夏の出来事だった。

幸せってなんだろう　それは誰もが一度は考えたことはあると思う。かの私もその一人。そして延長線上にある『じゃあどうやってたら幸せになれるのか？』っていう疑問は自然と湧いてくる。

いや、逆かもしれない。幸せになりたいと思うから、幸せってなんだろうって考えるのかもしれない。でも、どうだっていい。どちらでも構わないのだ。

結局　幸せになりたい、それは誰もが思うことには変わらないから。

でもこの素朴でとりとめない疑問はかなり厄介者で、答えはそう

簡単には出なかつたりする。多分、この問いは一生の付き合いとなるんだと私は踏んでいる。自分はこの世に生まれてそんなに経っていないけれども、そろそろ私なりの幸せの定理について考えなければ、と思う。

みんなだつてそのことを勘付き始めている。

だつてみんなは思っている以上に馬鹿じゃなくて、実は皆だつて私と同じ様に、幸せについて真剣に考えていると思う。ぼんやりしているクラスのあの子も、薄幸そうなあの子だつて 皆。どうやったら幸せになるか、それなりに考えているんだと思う。

そんな時。

高校一年の夏。ようやく私も高校生活に慣れ始めた頃、人生の転機とも言える出来事に遭遇した。その出来事は私の日常は確実に変化が起こした。

「ねえ、俺と付き合わない？」

ドラマのような台詞を吐かれたのは夏が勢いを見せている頃だつた。一つ上の先輩、男子バスケット部の結城先輩に私は告白された。

「……え、えと」

かっこよくて頼り甲斐のありそうな先輩は、女子の間ではひそかに人気があつた。けど、私は一度も先輩と話したことがなかつた。だから私は困惑した。いきなり過ぎてびっくりしたし、どうしたらいいかわからなくなつた。

「考え、させて……ください」

何も断ることはない、と誰もが言うかもしれない。友達にだつて自慢できる人だと思う。でも私は先輩からの誘いに待ったをかけた。もしかすると、一種の戸惑いだつたのかもしれないし、咄嗟に出た言葉かもしれない。けれど、私の脳裏に掠めたのは、

一人の親友の顔だつた。

## 第一章 始まり

名前。竹地あこ。冴えない名前、普通。

特技。水泳、でも高校に入る前にやめた。

趣味。特になし、でも漫画は読むのは好き。

学力。中の下、特に頭がいいわけではない。

容姿。そこそこ……だと思う。

将来の夢。自分のやりたいことを見つめて、お金持ちになって、格好良い人と結婚して、子供が出来て、いい家を建てて、円満な家庭を築いて、普通に幸せに過ごすこと。以上。

私の簡単なプロフィールを並べると、いかに自分が愚かなことがよく分かる。どれだけ無茶なことを言っているんだろう、と思う。特に最後。

「我ながら呆れる……」

持ち合わせているポテンシャルと、将来の夢の対比が間違っている。もしこれで将来の夢を実現しようと言うのなら、今の私には圧倒的に努力が足りないと思う。今更だけど、昔から何かを頑張つてこれば良かったと思う。勉強は特にその一つだ。正直、今の高校に入れたのも半ば信じられない。あの一夜漬けで山を当てたことは生涯の運を使い果たしたに違いない。

「……はあ」

駅の改札に吸い込まれてゆく人達を私は呆然と見ていた。中には同じ高校の制服を着ている子もちらほらと見かける。

「…………はあ」

肩当たりに汗がじんわりと張り付く。かんかん照りつける日差しは私の体温を上昇させる。私は木陰で待てば良かったにも拘わらず一度突っ立ってしまった場所に固執して、日の光を全身で浴び続けることになっていた。

と、私にご褒美をくれるかのように影が差し込む。

「ごめん、あつこ。待った？」

「あ、歩美」

私の待っていた友達がようやく姿を現した。息荒くした歩美は顔中汗まみれで、艶やかな長い髪の手元は僅かに濡れていた。髪もいくらが乱れている。

「あつこ……今年の夏は厳しーねえ」

歩美は改札に向かってゆく人達を遠い目で見ながら、両手で自分の顔を仰いでいた。

「まあねー。さすがにちょっときつい、かな……」

私が少しだけ口ごもると、歩美はいつもの様子ではない私に察した。

「ん、どうしたの？」

「んん……いや」

「……もしかして昨日のことで悩んでいる？」

すると歩美は私の顔を覗き込んで目を細めると、「バレバレ」と言って軽く笑った。

「まあ……でもしょうがないかもね」

そういつて歩美は私が否定する前に歩き出した。でも歩美の言うとおりで、私は先輩から告白を受けた昨日からずっと悩んでいる。

私は歩美の背中を追う。自動改札のない改札を抜け、私達は渡り廊下を使って反対側路線まで向かった。都市と真反対の方面のホームには少ない、大体が私達みたいな学生だった。

間もなく電車が来た。

僅か三両しかない、塗装のあちらこちらが剥がれていた電車は緩やかに私達の前に停車する。

「難しいよね……」

歩美は人ごとの様に呟いて電車に乗り込んだ。そうだね、と私も人ごとのことだったなら良かったのに、思う。私達はたまたま空いている二人席に座る。電車の中はかなりまばらだった。

「ねえ、歩美い？」

「なーに？」

私は窓に顔をくつつけて、流れる景色を見る。自分の乗った駅からどんと離れてゆく。

「……世界は私中心に回っていないんだよねー」

私は隣の歩美に聞こえないぐらいのボリュームに調整して呟く。私の視界には自分達の住んでいる民家と、遠くの山々が映っていた。私はその山々の稜線を見て、今更ながらにすごく田舎だな、とそんなことを思っていた。田舎は別に悪いことではないと思っていたけれど、好奇心いっぱい私にはどこか物足りなさを感じていた。

「そうだ、歩美」

そう言えば、と私は思い出す。何か刺激を求める様に私は歩美に聞いた。

「そういえば、歩美の好きな人とかって……聞いたことないけど？」

「うん、そうだね」

「そうだねって……いるの？」

「さあ」

白を切るといった以前に、歩美は答える気がなかった。私は肘で歩美の肩を小突く。

「いたっ、なに」

「本当は一人ぐらいいるんでしょ？ 歩美モテるじゃん、私達の中じゃ断トツだよ、彼氏ぐらいいるでしょ？」

歩美はモテる。中学の時から一緒だけど、男子から一番人気があった。男子の中で『女子ランキング』というものがあって、歩美は常に一番だった。ちなみに私は四番目らしい。

「んー、私はいいよ。勉強もあるしさ」

にも拘わらず、歩美はこんな感じだ。

「またまたあ」

歩美は中学の時も毎回そんなことを言って誤魔化してきた。でも今日はちゃんと聞きたい。

「そんなことは中学校の時から聞いてるよ。今日はそういうのなし、

絶対に逃がさないからっ」

私は歩美の前に両手を突き出し、今にも襲いかかるうとポーズを決める。すると歩美はびくりと体を仰け反り、顔が真っ青になった。歩美はくすぐられるのか苦手なのだ。おまけに小心者だから、電車の中で声を上げるなんて歩美の沽券にかかわりかねない。

「ちよ、ちよ、つとまった。あっこ、待ちなさい。待て待て待て。ええと、うん、そう」

「さあ、さつさと吐きなさい。できないのなら私が手伝うよ？ ひっひっひい」

ひくり、と顔をひきつらせる歩美。

「ずるい、ずるい、ずるい。あっこ、それ卑怯」

「卑怯でもいいもーん」

「まった、まった、まったあ。ええと、話すわ。でも、ちよつと待ってね、今思い出すから……」

そういうと歩美は腕を組んで唸った。私は歩美が答える間に気が削がれてしまい、両手を自分の膝下まで下ろす。と、不意に歩美は私を見てほっと息をついた。そして、次に視線を泳がせてきよるきよると周りを見回している。

「あ、やつぱり」

私は人差し指一本を歩美の脇腹に滑らせた。

「ひゃう」

可愛い声を上げ、しっかりと背筋をぴんと張った。

「どつちがずるいんだか。まあどつちにしろ、無駄だよ歩美。後、五駅あるから」

私はさらに歩美の脇や腰に手を当ててくすぐりを始めた。

「あっはっは！ やめ、あははは！ ちよ、ちよつとつ。やめて、やめて、やめて！ わかった、わかった、わかった、わかった。言うから、分かった今すぐ言うから！ わたる君、渡君よ！」

ぴたりと歩美の脇腹から手を引く。

「わたる……君？ 誰それ」

歩美の目端には涙がうつすらと浮かべている。

「……塾の子。でもさ、ちょっと気になるかなって感じの程度」

歩美は珍しいぐらいにしおらしく、頬を朱に染めていた。

「え？ 何？ 好きなの、そうなの?!」

「だから気になる程度っていつてるじゃんっ!」

歩美の平手が私の後頭部をひっぱたく、ふわりと私の髪が見事に崩れる。

「痛いなあ、もう。でも、そーなんだ……ふう~~~~ん」

「何っ」

どうやら歩美の顔を見ると、どうにも気になるって程度というのは嘘っぽい。このまま気持ちを追求してもいいけれど、それだと多分、歩美は答えてくれないだろうから、違った方向から攻めることにした。

「で……どここがいいの、その人？」

「……別にあつこに良さを知ってもらいたくないんじゃないけど」

「まあまあまあ、いいじゃん、いいじゃん。ほら、馴れ初めとかあるでしょ？」

「いやいや、そもそも付き合ってもいないし」

歩美は鋭い目付きで私を睨みつける。でも、歩美は続けた。

「でも、まあカッコイイかも。後、将来は検事目指しているらしい

……よ?」

「へえ!」

「……まあね」

歩美は俯きながら顔を赤くする。歩美が女子モードなんて珍しい。同性の私でもかわいいと思う。それがちょっとだけ悔しかったりする。ここでさらに質問をしようと思った時、

電車の扉が開いた。

「あ、どりー」

歩美は逃げる様にして私から視線をそらし、話題さえも逸らした。

「おはよー」

数人が電車に乗り込んでくる、その一人に私の親友がいた。今日もトレードマークのポニーテイルは左右に揺られている。屈託のない笑顔を浮かべながら私達の元へと近づいてくる。

「今日も暑いね、歩美、あっこ」

「だねー」

歩美は相づちしている。けれど、私は彼女と顔を合わせることが出来ない。二人が話しているところを私はどこか一步引いた気持ちで見ている。息苦しくて、胸が痛い。

どりー　私が結城先輩に告白されたことを聞いたらどう思うだろうか。喜んでくれるのかな、悲しむのかな？　もし、私が先輩と付き合ったらどうだろう？

その時はどりーはどんな顔をするだろう……。

「ん、どしたの、あっこ？」

私の様子に気がついたどりーは私に声をかける。

「あ、ううん。何でもないよ、あはは」  
ほんと暑いよねー、勘弁してほしいよねー、と会話が不自然にならないように、私は適当な言葉で返す。

「やー、昨日は夜更かししちゃったあ」

「えーどりー、今日は朝から体育あるよ」

私は二人が会話しているのを見て、すぐに窓辺に視線を移した。そこにはのどかな田舎風景がどこもかしこにも並んでいた。何か刺激が欲しかった、けれどこう思う。私の日常を壊してでも手に入れないものじゃない、そう思う。

歩美は私がずっと外ばかり見ているので、どりーとの会話中に何度も横から小突いてきた。けれど、私は何も返さない、反応しない。だってどりーにどんな顔をして話せばいいのかわからないのだ。私は歩美みたいに器用な人間じゃない。

でもいつかは歩美みたいに器用な人間になりたいと思う。でも無理だ、だって私は不器用な人間だから。昔から自分がどんな人間かなんて、とっくに知っている。だから諦めてしまえばいい。

けれど、私の感情の一部が激情にかられていた。その何かは自分でもよくわかっていない。

でもそれは、自分がもがいているんだと薄々と感じていた。

私立桜ヶ丘高校は最寄りの駅からは遠く、校舎は山と隣接した様な場所に建てられている。生徒達は駅からさらに、バスで学校に向かうことになる。それはそれでいいのだが、バス停から学校までの微妙な距離は、私達生徒にとっては結構不便だったりする。

特にバス停についてからの坂道はすごくつらい。入ったばかりの頃は正直、あの坂をこれから登り続ける、と思うと気分が沈んだ。ようやく慣れ始めたのは一ヶ月も過ぎた時。でもその次にはさらなる困難が私達を待ち受けていた。

「暑い」

夏である。炎天下である。それは私達にとって地獄他なかった。

生徒達が自らの足で坂道を歩く中、教師達は生徒達が歩く坂道を車でかつ飛ばしていた。歩いている生徒達を蹴散らし、自分達は悠々と校門の中に入っていた。

「鬼か、あいつら……」

私は悪態をつく。横で息をついている歩美もこればかりは理解しにくれた。

「信じらんない……ああ、ほんと暑い」

「二人共、いいじゃん、これぐらい。この坂、結構いい運動になるよー」

どりーは一人だけ息が上がっていない、どりーはそのまま元気よく坂を駆け上がっていた。後ろ姿のポニーテイルは今日も元気に揺られている。

「信じらんない、あの子……」

歩美は鞆からハンドタオルを取り出して、坂道を駆け上がるどりーを細目で見ていた。

「はあ、はあ……もう駄目」

私は正直、へばっていた。これでもずっと水泳をやっていたけど、やめたらすぐに体力も落ちてしまった。

「ちよつと、大丈夫あつこ？」

「あ、うん。まあ、大丈夫。」

と、私が顔を上げた時、言葉が詰まった。私の目を向ける先そこには一人の小さな背中が視界に入った。制服を着た男の子は中学生みたくに体が小さく、華奢な瘦躯。後ろからみた制服は砂か白いほこりみたいな汚れが付着し、さらには袖も擦れていた。

でも私が目についたのは、彼が持っていたポストンバックから覗かせていたあるモノだった。

「どうしたの、あつこ？」

歩美が横から私に声をかける。けれど私は聞く耳など持たず、横一線から体一つ抜きん出た。男の子は私達の少し前を歩いているところだった。男の子の老緑色のポストンバックの中からはきらりと光沢を放つ、漆黒の何かのぞかせた。

危ない。

ポストンバックのチャックは空いていて、今にも荷物がこぼれ落ちそうだった。坂を一步踏み出すにつれて、黒い何かは徐々に姿を表していった。大きくて明らかに高そうな、天狗のような形をしたカメラだった。

私は近づき、男の子の後ろにちょうど位置を付けた。カメラはまだカバンから覗かせている。今にも落ちそうだった。正直、最初は声をかけるつもりはなかった。落ちそうになったら後ろから手で支えてやるう、と思ったくらいだった。でも、近々でカメラを見るとその意思はまるで反転し、声をかけていた。なぜなら、そのカメラは素人の私から見ても、後生大事にしてもおかしくもない代物だったからだ。

「危ないですよっ」

私は傾いているカバンの端に手を伸ばして、男の子に注意をした。

「……え」

当の本人は振り返り、ひどく驚いた顔で私を見つめた。するとすぐに顔を反らし私が持っている手を振り払うと、声を上げた。

「あ」

男の子はようやく自分のカバンの自体に気がついたようで、慌ててポストンバックのチャックを閉める。そのまま、私にお礼の言葉もなく足早に坂を上がっていった。

「あ、ちよつと」

男の子は圧倒いう間に坂を駆け上がって、その小さな背中は見えなくなっていた。

「どしたの、歩美ー？」

歩美達もようやく追いついたようで、私の後ろから声をかけた。

けれど、私は坂の先ばかりを見つめていた。私の目にはその小さい背中がまだ焼き付いていた。彼の通った軌跡にはもう他の誰かが坂を上っている。真っ黒のスボンの足下にはゆらゆらと陽炎が纏わり付いていた。太陽はじりじりと気温を上げて、私達にまるで迫ってきているかの様だった。私の伝っている汗はその暑さを物語っている。

私の夏が始まるうとしていた。

“結婚”、それしかないと思っていた。

大して才能のない私が人生の一発逆転を狙うのにはそれしかない、そう考えた。でもそれって実は私が単に恋愛をしたかっただけかもしれないし、高校デビューを目指したかっただけかもしれない。

はたまた。それが勢いなのだから、憧れだったのかよくわからない。でも、水泳をやめたからにはそれなりに頑張ろうと思った。

ただ……何を頑張るのかは私にはよくわかっていなかった。

「竹地あこ」

「はい」

「竹井歩美」

「はい」

「竹々翠」

「はい」

三人共、名字に漢字の『竹』が入っていたから昔から『竹トリオ』と男子から呼ばれてきた。私達三人は小中校とこれからの高校も学校は一緒に、ちなみに全員同じクラスになるのは四度目、最後に一緒になったのは中学二年の時以来だった。そして高校からは同じクラスで意気投合した桃ちゃんと奈帆を加え、今日も私の席を囲んで話していた。

「それでさー」

朝のホームルームが終わると、クラスはすぐに騒がしくなった。特に男子達は大きな声で話しているので、うるさかったりする。テレビ、ゲーム、くだらない話題まで何から何までも大げさに話していたりする。正直、あの輪にかけた会話技術は女子の私達からしても、目に張るものがある。多分、その男子達のうるささに対抗できるのは私達ぐらいだ。

「って何やってんだよ」

と、声が聞こえたのは男子グループのリーダー格の日比野君からだった。一人の男子が突然、上着を脱ぎ始めたのだ。まだ教室に女子がいるのに拘わらず。教室にいた女子は少しだけ距離を置いて男子から遠ざかった。

「いや、だって」

上着を脱ぎ捨てた男子は日比野君を見て、そんな言い訳を言う。私達は察して、椅子から立ち上がり、それぞれのロッカーに向かった。

今日、最初の授業は体育だった。

「あー……完全にバテたあ」

初っ端から走らされた私の体力は底を突きかけていた。

一時間目と二時間目は体育、よりもよって私の不得意のバスケットだった。その上、相手チームにはバスケット部のどリーがいて、チームは私をどリーにワンマンプレーを押しつけられた。どリーのことは親友のあんたがよく知っている、というよくわからない理由で。仕方なくどリーをマークすることになった私は、どリーが素早い動きをコート中、縦横無尽に追いかけることになった。

そして案の定、私は体育の時間が終わる頃には完全に疲れ切っていた。

「もう今日は無理。この後授業とか、無理！」

「えー早いよ、あつこ」

渡り廊下をふらふらと歩いている私に、どリーが後ろから私の肩を叩いた。

「……どリーがたくさん走るから」

「えー」

「いやいや、あつこの体力が落ちたせいだって」

さらに後ろから歩美が私の肩を叩く。そのまま自分の腕から全身を私に預けてきた。

「というか、歩美がどリーにばかりパス回すからいけないんだよ

！ 後、重い！」

「だって、点取れる人にパスを回すのって正攻法じゃん？」

歩美の言うことはいつだって正しい。だから、私は何も反論せず抱きついてくる歩美を振り払って歩き出すことしか出来なかった。スノコは歩く度に石畳の床に打ち付けて音を鳴らした。私はふと振り返り、歩美とどリーの後ろを歩いていた桃ちゃんと奈帆を見る。

「まあまあ、ドンマイ」

「しょうがないです、ね……」

私は諦めの嘆息を漏らすと、踵を返して階段に足をかけた。正直、歩美には敵わない。勉強も顔だって。でも歩美のことは嫌いじゃない、むしろ好きだ。ただ、私がいつも歩美に対してツンツンしてしまうのは、悔しかったんだと思う。

多分、自分の無力さに対してだ。

一年生の教室は全て三階にある。

体育の授業でこれでもか、というぐらいに走った私は三階までの階段を歩くだけで軽く息をついた。まだチャイムが鳴っていないためか、一年生の廊下は静寂に満ちていた。私は一番に廊下にたどり着いて、後ろでは階段を上がっている皆の話し声が聞こえてきた。

私しかない、他に誰もいない廊下　そのほんの一瞬、一時。  
私の教室から一人の男子生徒が飛び出してゆくところが見えた。制服姿の男の子は手にノートを抱え、私のいた反対側の廊下を目指して走り出していた。

誰だろう？

一瞬過ぎて誰かは気がつかなかったけれど、走りすぎる彼の背中を見つめて気がついた。彼の、その小さな背中に見覚えがあった。

「あそこ？」

後ろから歩美から声をかけられた。もう皆は階段を上りきっていたのだ。歩美の後ろにいた皆は立ち止まっている私を不思議そうに見ていた。

「あ、いやいや。何でもない」

皆は私をそれ以上訝しむことなく、歩き出した。私は燦々と照り返す、廊下に目を細めながら皆の歩く先を見つめていた。

彼の姿はもういなかった。

あれ、と気がついたのは丁度予鈴が鳴った時だった。

私達が教室に入った時にはまだ男子が着替えている途中で、それでも男子は「入ってきてもいいぜ」とよくわからないことを言った。そう言い放った男子はとつくに着替え終わっていて、他の男子と話していたりする。なんて自分勝手な、と私は思ったけれど、私達女子はその男子の言うとおりに教室の中に入った。中にはまだ上半身裸の男子がいたけれど、女子の目に晒されることも気にせず、着替

えていた。

「くっせえ」

教室は男子の使った制汗スプレーで白みを帯び、軽い霧に包まれているようで気持ちが悪かった。デオドラントと饅えた汗の匂いが入り交じる教室はまさに今言った男子の通りだった。

「うわー、男子」

女子の皆は男子を蔑むような目で見るが、それも一瞬。男子はあいう人種だどこか諦めて気持ちで皆は自分の席についた。私はロッカーに体育用意をしまつて、自分の席についたところで、いつもの皆が私の席を囲んでいることに気がついた。

「あつこく、今日のお昼はどうする？」

どリーが私に尋ねる中、次の三時間目が終わればお昼休みか、と私はそんなことを考えていた。

「えーと、いつもので」

「ん、了解」

どリーのポニーテイルが上機嫌に左右に揺られている。私は歩美と桃ちゃんが恋愛トークの話題に華を咲かせている中に、割り込むように席をついた。

「やっぱり優しいのが一番だよな」

「んんー、確かに桃ちゃんの言うとおりかも」

私はお尻を椅子に落ち着かせて、手を机の上に置いて皆を見た。歩美と桃ちゃんは相変わらずで、どリーと奈帆は二人に相づちを打っている。私も二人の話に追いつこうと話を聞いている途中、思考が止まった。

何か、ある。

何気なく手を机の上から下に滑らせた時、何かが当たった。私が机の下に視線を向けた時、

「ねー、あつこはどう思う？」

そこに歩美は私の顔を覗き込んで聞いてきた。

「え、あ……あー」

話は聞いていた、多分恋愛の話だ。でも私は机の中に入っている何かが気になって、歩美の話していたことが飛んでしまう。両方に意識を集中することが出来なくなつて、受け答えがしどろもどろになつてしまう。

そこに予鈴が鳴った。

「ええー」

皆は残念そうな顔をして自分の席に戻つていった。後で答え聞かせてね、と歩美は手を振つて笑顔を浮かべていた。私は多分笑顔だつたけれど、ぎこちなかつたんだと思う。

私の手の中に、机の中に。

私の手は無機質なごつごつした何かがあつた。

もちろん、私の持ち物じゃなかつた。

## 第二章

私は全く身に覚えのない物を机の中でいじくり回していた。別にやましいことをしているわけではない、けど多分周りから見たら絶対に変な奴だと思われるに違いない。

それにしても何だろうこれは。

「私有地、私有民の廃止、またその他にも地方行政制度班田収授の法の実施、税制の一致。それらを行うことによつて蘇我氏を……」

歴史の大内先生は今日もだるそうに教壇に片手おいて話している。もし今が授業中じゃなかつたのなら、迷わず私はこの知らないモノを掲げて皆に知らしめるはずだ。でも今は授業中、そんなことをしたら間違ひなく先生に怒られる。

正直別に良かったかもしれないけれど、怒られた後に机の中を調べ上げられるのは絶対に嫌だ。学校に変なモノを持ち込んでいると思われたくない。

「さて大化の改新は大宝元年の大宝律令の制定によつて確率されたわけだが……」

大内先生は腕が疲れたのか、今度はもう一方の腕で教壇に片手をつき始めた。相変わらず気怠そうに授業をしている。先生は一応きちんと説明してくれるが、授業としては全く面白くない。だから皆は話半分で内職をしている生徒がかなりいた。

私もそうだ。

私は大内先生が黒板に何か板書し始めたのを見て、さつと机の中のモノを私の視界に晒した。と、ここで予想外の物を手にした私は思考が止まった。

「カメ……ラ？」

こんなもの間違えても机の中には入れないだろう、と私は思った。

昼休みを知らせるチャイムと共に皆のエネルギーが一気に爆発されるのが感じ取れた。特に男子達はチャイムが鳴ると同時に机から飛び出していた。まだ号令が言い終える前だったけれど、そんなことはお構いなしだ。

「っしやあああぁ！」

私の前の席に座っている曾野君も同様に掛け声と共に教室の後ろを駆けだした。一見して小物に見えた彼の背中だったけれど、男子の中では一番に足が早い窓辺の席という大きなハンデを抱えながらも、彼が一番早くに教室の扉に手をかけた。

「礼」

号令が掛かり終える頃にはもう半数以上の男子は教室から去っていた。私達女子は静かになった教室を気にすることなく友達の輪を作り始める。

「あっこ〜」

私は机に座って前の席からお弁当を持ってきている歩美を待った。私の机に歩美のお弁当箱が並ぶ　　続いて二個、三個。

「机、借りるね」

桃ちゃんも誰もいない男子の机を引っ張り出してきて、私の隣に並べた。歩美も奈帆も近くの席から机を取ってくる。

「そろそろ……かな？」

そう言って歩美は教室の正面にある壁時計に目を移した。私も一緒に時計を見た。長針は昼休みが入ってからまだ一分ほどしか経っていないことを知らせている。その時、廊下から靴が床を弾く摩擦音が聞こえてきた。その足音は男子とはまるで違い、軽々しく、滑らかだ。そこにちょうど針が動こうとしていた。

「ただいま！」

既に開け放たれた扉から一人の生徒が入ってきた。教室の皆は扉に集中。私もまた入ってきた人物を見た。そしてこう思う。ああ、今日も曾野君の負けだ。

「あ、お帰り、どりー。今日も早かったねえ」

どりーの手には幾つかの総菜パンを手に持っている。どりーは誇らしげに私達の席に持つてくると、「はい」と私の机に置いた。

「ふっふっふ、今日はジャンボカツサンドをゲット出来たのだ」

そう言ってどりーは今日一番の収穫を指さしながら自慢した。

「おぉー」

皆は包装されたカツサンドを食い入るように見つめていた。正直これが二百円だというのはある意味詐欺に近い。どりーはぎぢぎぢに詰まっているカツサンドをつまみあげ、別にもう一つサンドイッチを選んで取った。

「んー……私はこれ」

私は予め頼んでおいた野菜コロツケパンとやきそばパンを二つ受け取る。そして最後の一つは歩美の分だ。

「ありがとう、どりー。さっすがっ」

「えへへ」

こうして私達の昼休みは始まる。

教室の隅で私達五人は机を囲んでお昼ご飯を食べて、くだらない話で盛り上がって、楽しんで。窓の外の青い空はどこか青春っぽい色彩を帯びて、透き通っている。微かなそよ風は私達の楽しい会話をどこかへと運んでいる様な気がした。

いつもの教室、いつもの皆。

「あ」

でも、今日が一つだけ違うことがあると言っのなら。

「ねえ、そう言えば曾野君は？ まだ帰ってきていないよね？」

どりーは食べるのに夢中になってしている手を止め、私に顔を合わせ  
る。

「んー、なんか先生に捕まったみたい。叫びながら走っていたから  
ねえ」

「そ、そっかあ」

「馬鹿なんだよ、あいつ」

歩美は横からあげつない言葉で切り捨てる。

「そーそー」

私は二人を見ながら右手で野菜コロッケをかじり付いていた。左  
手は机の中に収まっていた。

まだ私は、誰にも言えなかった。

タイミングって結構大事なんだな、としみじみ感じた。

それはどんな物事にも通じるところがあって、タイミング一つで  
上手くいくことや失敗することもあるだろう。けれど私達、友達の  
間で仮に失敗が起きても、取り返しがつくことは容易に想像出来た。  
なら今すぐに机の中にある物を取り出して、「何これー？」と皆に  
見えるように掲げれば良かったのだ。

でもやめた。そこに明確な理由はない。なんとなく、というやつ  
だ。でも、本当は言いたくて、聞きたくてうずうずしていたのだけ  
れど、それも最初だけの話で。

今の私の中にはカメラという存在自体が頭から抜け落ちてい  
た。

「あ、桃ちゃんのお弁当おいしそう……」

私の席を中心に囲んでいたのは、歩美、どりー、桃ちゃんと奈保。ちなみに私とどりー以外はお弁当を持参していた。私はまだ残っている桃ちゃんのお弁当に、物ほしそうに友人のお弁当を見つめてみる。もちろん、くれることを期待して。

「こーら、あっこ。図々しいよ?」

「えー、だつて桃ちゃんのお弁当おいしそうじゃん……歩美だつて実はそう思っているでしょ?」

「いや、分かるけどさ……そう言っていていつも、もらってない?」

「うっん、いいよ。あげるよ。その代わりに、物々交換だからね?」

「ん、了解」

私はやきそばパンを半分ちぎって桃ちゃんの弁当の蓋に乗せる。

代わりに私は唐揚げを一つもらう。

「ねー、そういえばさ……。夏休みとかってどうする、皆? 予定とかある?」

歩美が皆に聞く。私の口の中は桃ちゃんにもらった唐揚げで広がっている最中だ。

「んー、部活かなあ……」

どりーが上を向きながらぼやいた。それに桃ちゃんと奈帆も頷く。「あ、そっか」

どりーと桃ちゃんと奈帆は皆、バスケット部に入っている。だから夏休みはほとんど毎日部活だという。

「でも、何日か空いているんじゃない? せっかくだし皆でどっか行くっよ」

「うん、いいかも」

口に入っていた唐揚げを飲み込むと、私は歩美の提案に乗った。「でも、何するの?」

私がそう聞くと歩美は「んー……」と軽く唸って考え込んだ。そこにどりーが「海!」と叫ぶ。桃ちゃんと奈帆はどりーの案に目を輝かせた。

「えー……」

ほぼ皆の意見が固まりつつある中、私だけ反対のムードを促した。遊ぶことには反対じゃないのだけれど、海はちよつと嫌だ。というか水泳をやめてから太ったせいだけでも。そんな一人だけ反対する私に、当然の如く歩美が突っかかる。

「え、そんなに嫌なの？ あつこ？」

「まあ、少し……だけ？」

私は曖昧な言葉で濁すと歩美は怪訝そうな目付きで私を観察し、「あつこ、太ったでしょ？」

と、私の一番に気にしていることを突いた。このやろう、歩美。歩美はスタイルがいいからってそんなことを簡単に言えてしまうんだ。と、ここで桃ちゃんが横から口を割る。

「あー、でも私も最近ヤバイかも。妊娠線っていつの？ なんか二の腕に肉割れが出来ちゃってさ……」

桃ちゃんはそう言うと、右肘を上げて自分の腕を覗き込んだ。そこには僅かながら肉壁の層が薄く浮かび上がっていた。それを見て私は反応してしまう。

「あ、それぞれそれ！ 私もやばい、やばい！ ていうか桃ちゃんはいいい方だよ！ 私なんて、二の腕だけじゃなくて、股の付け根とか、膝裏とか、後はお腹とかにも出来てるんだよお！ 特に股の付け根なんて、痣みたいに赤い線が出来ているしさ！ ここ最近なんだよ、めちゃくちゃひどくてさ〜！」

私の猛然とした口調に皆は黙り込み、見つめられた。あれ、何か変なことを言った？

「え……私もあることはあるけど、そこまでは……」

歩美は引きつりそうな苦笑いで私に言った。でもほとんど同情に近かった。

「あつこ、何キロ太ったの？」

どリーがストレートに私に質問をぶつけてくる。

「え、嫌っ。教えないよ、そんなの」

絶対に教えない。多分、今までで一番体重があると思う。

「教えてよ、あっこ？ 私も言うからさ」

「え、やだやだやだ！ だって絶対歩美、私よりも軽いじゃん！ それに皆は部活やっているし……。奈帆なんて華奢だから、私よりも断然軽いだろうし！ いや、絶対に言えな  
い  
！」

「ちなみに私は五十近いよ？」

と、どりー。

「えー、案外どりー体重あるんだねー。私も同じくらい」

歩美とどりーは一緒くらいみたいだ。

「私は、四十五前後かな？」

と、桃ちゃん。

「……じゃあ、私が一番軽いかもしれませんね」  
と、奈帆。

皆が体重の話で盛り上がっている中、私の気分はどんどんと沈んでいった。過去の自分の体重が今は懐かしくも、うらやましくも感じる。なんだか今の私には皆が別次元の人に見えてしまうのは気のせいだろうか？

「……ねえねえ、あっこはどうなの？ 増えたって言ってもあっこならすぐにやせられるよ」

桃ちゃんが身を乗り出して私を見つめた。興味津々だ。同時に皆も私に注視して、何かいう空気を作り出した。

「やだ　　っ！ だって、だってえ、水泳やめてからだいぶ増えちゃったし……」

水泳をやめたというのに、今までと同じ量のまま食事していたから、気がつくとかかなり増えてしまっていた。

「で、どうなの？」

歩美が意地悪そうな顔で詰問する。ああ、もうこれは言わないといけない雰囲気だった。

「えー……と」

サバを読んでしまおうか、それともこのままはぐらかしてしまおう

うか。でもサバを読んだところで、歩美にはバレてしまう。だった  
ら、どうしよう？ そう迷っている振りをしてその場をやりきろう  
として考え込んだ。

「ちよつとすみません」

そこで誰かが話に割り込んだ。

「あ、はい」

私達の会話を中断され、私は顔を上げた。会話を止めたのは私達  
ではなく、外部からの触発だった。声をかけた当人は、私達の机の  
端に凝然と立ち尽くし、もじもじと体をくねらせていた。まだ二次  
成長段階に入ったばかりかと思わせる背丈とそれに準じる広くない  
肩幅、眉毛ぐらいにまで切りそろえられた前髪、特筆することのな  
い男子はまっすぐ貯立して私達の前に立っていた。

「あの、その……」

男子は逡巡して何か言いたげである。でも、自らの指を絡ませる  
だけで口はそれ以上、何も言うことはなかった。

「……？」

私は首を傾げた。この子は何がいたいんだろう？

「あつこ、どうしたの？」

歩美は私に尋ねる。が、私は歩美を見ることなく、男子の方を見  
ていた。すると男子は私の視線に気がついて私に目を合わせてきた。  
特筆のないから聡明、といえは聞こえのいい男子の顔は先ほどの羞  
恥することなく、まっすぐに私を見つめていた。

「……………」

その顔を見ていたら私はぴん、ときた。

私は机の中にあつたモノを引っ張り出して、勢いよく椅子から立  
ち上がった。

「あつこ、え、何、それ」

歩美は戸惑う声が僅かに耳に入る。けれど、反応は示さなかった。  
男子の私の見る瞳はすぐに煌びやかに弾み、光った。私は持って  
いたカメラを彼に差し出すと、彼は受け取り「ありがとう」とにつ

こりと笑った。そのまま、彼は私に背を向け、教室の外に向かつて駆けだした。私が呼び止めるまでもなく、男子の姿は見えなくなる。「え、さっきのカメラ。何？」

歩美は声が聞こえる。けれど、今は少しだけ遠い。

「トイレ、行ってくる」

私はいなくなった背中の中の残像を追って、歩き出した。教室の外廊下を左右を泳がせたが、そこに私の求めていた背中は見つけることは出来なかった。

「……いない」

朝、坂道で見かけた男子だった。そして今日は二度目、その姿を見ることになった。彼の制服。それはよく見ればうちの学校の制服とは微妙に異なったものだった。

あれは、誰なんだろう？

もう一度だけ廊下に目を配らせるけど、やはり彼の姿は見えなかった。私は諦めて教室に入ると、皆がこちらを見て手を振っていた。「で………どうなの？」

私が席にまで向かっていると、いきなり桃ちゃんが私に聞いた。

「え、何のこと？」

「いやいや、さっきの話の続き」

ああ、と今は心底どうでも良い風に私は頷く。そこに一つのノイズが発生した。教室の扉はいきり立つみたく、派手な音を立てる。

「やらかしたあ！」

振り返れば、曾野君が教室の扉を手にかけて入ってくるようだった。クラスの視線は一斉に曾野君に集まり、私達の会話はまたも遮断された。

予鈴はもう鳴っていた。

「ねえねえ。そう言えば、あつこの机の中に何でカメラなんてあつ

たの？」

放課後の教室 私と歩美は二人で話していた。どりー達は皆、バスケ部の活動があるからもう教室にはいない。教室の外の空は少しずつ変化を始め、太陽の光はどんどん遠くに遠ざかっているかのようにだった。私と歩美はこうやってたまに教室に残ってだべっていた。

「さあー？」

私も何で入っていたのかわからない。歩美は「んー……」と腕を組んで唸ると、簡単に結論を下した。

「ストーリー、かもね」

「やめてよ、気持ち悪いって！」

「あはは。冗談、冗談」

歩美は笑いながら席から立ち上がった。歩美は目を細めて、一度だけ壁時計を見た。

「あ、そろそろ行かなきゃ」

「いつものアレ？」

「うん。それじゃあね、あっこ。帰り道、気を付けて」

歩美は椅子を机の中に戻って、鞆を持って私の横を通り過ぎる。私から見た後ろ姿の歩美はちょうど夕焼けの太陽に向かっていくように輝いて見えた。残された私は、まるで世界の真ん中で一人取り残されたような気分だった。

「行ってらっしゃーい」

歩美のいつもの『アレ』というのは、歩美が通っている極真空手の道場だった。あまりクラスの皆には知られていないのだけれど、歩美の夢は警察官になることだった。だから日夜、歩美は夢に向かって努力しているのだ。そういう姿勢は実は尊敬をしていたりする。が、同時に具体的な夢を持たない私にとって歩美はうらやましかつたりする。

「あーあ……」

私は空虚な夏空を見ながら立ち上がる。物語みたいラストにか

けて燃え上がる一日だったらな、と私は夕焼けに沈む太陽を背に帰路へと向かった。

「ただいま」

家について、玄関の扉を開くと、リビングからお母さんの声が聞こえてきた。靴を脱いですぐに二階へと上がる階段に足をかけたところでお母さんに呼び止められた。

「もうすぐご飯だから。着替えたらお兄ちゃんも呼んできてねー」  
「はい……」

正直断りたいところだったけれど、そうするとまたお母さんと押し問答になりそうなので、了承した。陰鬱な冴えない気持ちで、足どり重く二階へと上がってゆく。兄貴の部屋は手前、その奥が自分の部屋だった。

「はあ」

ため息交じりに自分の部屋に入ると、簡素な部屋が視界に飛び込んだ。鞆と自分自身をベッドに投げると、鞆は軽く浮き、私の体はベッドに埋まった。

「フーカールーたー」

疲れた、ただ学校に行っただけなのに。毎日は楽しいのだけれど、充実感はない。一度、体を起こし、部屋を見渡した。八畳ほどの部屋にはクローゼットと本棚、勉強机、それにベッドぐらいしか目ぼしいものはない。テレビもないし、パソコンだって馬鹿兄貴に持っていかれてそれっきりだ。ベッドから勉強机の前にある椅子に移動すると、一枚の写真たてを手に取った。

「……懐かしいなあ」

昔、水泳をやっていた自分の姿がそこにはあった。小学校一年から始めて、中学三年までの九年間やっていた。水泳をやっていた頃、充実感は多少あった。タイムが伸びたときは嬉しかったし、スクールの子とも上手くやっていた。そこは否定しない。でも、  
「なんか違うんだよな」

練習は地味だし、つらいし。嫌々続けていたような気がする。水泳をやっている時が一番輝いている、と言われるとちよっと違う気がした。

「うーん……」

手にとった写真たてを再び元の位置に戻す。再び部屋の中を見回してみる。すると、本棚に目移り、そして一冊の少女マンガを手に取った。

「げつと〜」

取りあえず三巻ほど手にとって再び、ベッドに寝転んだ。ページを見開けば、私の理想とされる世界が広がっていた。多分、この漫画こそが恋愛こそ幸せになれる、と思った一番のきっかけだった。人に話したら馬鹿だと言われるかもしれない、でもいいんだ。自分の中でどこか私の支えになってくれる気がしてならないから。

「やっぱりいいなあ」

頬を緩ませながら漫画の世界に入り込む。やっぱり私にとって輝くってというのは恋愛だと思った。私は漫画の世界に浸り込み、気がついた時にはどんとページをめくっていた。読み出したら止まらないという漫画の罪なのが性なのかもしれない。と、私は一巻を読み終えたところで、階下からお母さんの叫び声が聞こえた。

「あー、はじめー、ご飯ー」

「はい」

やばい、完全に忘れていた。私はすぐに部屋着に着替え、階下を下りようと部屋を出た。一瞬、隣の兄貴の部屋を見るが、放っておいて下に下りた。下にはお母さんがお皿を並べている途中だった。

「あれ？ はじめは？」

「さっきお母さん呼んでたじゃん。もうすぐ来るでしょ？」

「呼んできてよ、一応」

「えー、やだ」

「ほら、ほら。行ってきてよ」

圧倒的な拒否を示すけれど、お母さんには逆らえない。「しょう

がないなあ」と軽く愚痴をこぼしながら、降りてきた階段へと引き返した。二階にある兄貴の部屋の前に立つと、ぶしつけにノックした。

「おい、ご飯」

反応は全くなかった。代わりに部屋から漏れている音楽が私をあしらうように返事した。せつかく人が呼んできているのに 腹立つ。今度はさらに強くノックをする。

「お〜い！ 飯〜！」

「へいへい」

ようやく返ってきたのは墮落した情けない声だった。それだけでなくイラつく私。兄貴の反応があったため、私は一人で階段を下りようとしたところ兄貴の部屋の扉が開いた。中から出てきたのは、脂を吸った汚らしい長い髪とぶかぶかのシャツを着た巨漢だった。私の倍以上面積の広い首周りが緩くなつたテーシャツと、醜く育ってしまった皮下脂肪が目についた。二十代にも拘わらず、お父さんよりもお腹が出ていた。

「お〜う、お帰りい」

兄貴は私を見ると、いきなりそういった。新橋の泥酔したサラリーマンが吐きそうな口調だ。第一声がそれかよ、気持ちが悪い。ほんとやめて欲しかった。

「きも」

ストレートに心に思っていることを吐露する私。私も兄貴に対する第一声がそれ。どっちもどっちかもしれない。

「おう」

眉一つ変えることなく、兄貴は頷いた。開き直っているのか、慣れているのかわからないけれど、恐ろしいくらいの前向きだった。そこだけは評価したい。でもやっぱり、気持ちが悪い。

下に一緒に下りると、お母さんは橋を置いて待っていた。無言で私と兄貴は自分の席についた。

「それじゃあ、いただきますーす」

三人は仲良く手を合わせて夕食が始まった。お母さんの横に一席空いている席のお父さんは今日飲み会だそうだ。いつもの風景、それだけだった。

「ごちそうさま」

「……もういいの？」

「うん。ダイエツト中……だから」

だから、をわざと強調させて兄貴を睨みつけてやる。でも、馬鹿兄貴は無頓着におかずを次々に口に放り込んでゆく。少しはあんたも気にしろってんだ。私は食器を持って片付けると、茶の間のテレビを付けた。

茶の間ではお笑い番組が繰り広げられていた。私の好きな番組の一つだ。ここからドラマと連続してテレビに釘付け状態になる。お母さんも私と並んでソファに座って一緒になってみる、馬鹿兄貴はご飯を食べ終えたらさっさと二階へと上がってゆく。

「ただいま」

お父さんが帰ってきたのはちょうどドラマがもうすぐと言うところで終わる頃だった。液晶ではクライマックスからちよつと抜けて最後のどんてん返しの引きに私は画面に夢中になっていた。お母さんは構わずドラマを放り出して、玄関へと向かった。

「たっただいまー」

「お帰り」

振り返れば、紅潮したお父さんは朗らかな笑顔で帰ってきた。こちらまでもにっこりと笑顔で返してしまっただけにいい笑顔。多分うちのお父さんは父親ランク付けでいったら間違いなく上位に入ると思う。娘の私がいつの間違いない。

「あつ、私先にお風呂入ってくるね」

「うん」

私は見終わったテレビから離れ、横目に仲良さそうにお父さんとお母さんを見ながらちよつとだけ微笑んだ。私は二人の大切な時間の邪魔をしたくないのだ、だから私は二人の空間から自ら排斥する。

「……………」

私は衣類を脱衣所で抜いて、浴室に入る。

湯船に浸かりながら私は吐息を漏らす。今日も考え事をするけれど、蒸気が上がってゆく湯気みたいに掴めず消えてゆく。なんでだろう、と私は網戸に映る夜空を見て思った。

なんだかなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2854y/>

---

恋愛脳の私×戦争

2011年11月15日03時20分発行